



○ 地域内外・農家非農家を問わない「協働の力」で棚田の再生と地域の振興を図っている。

基本情報

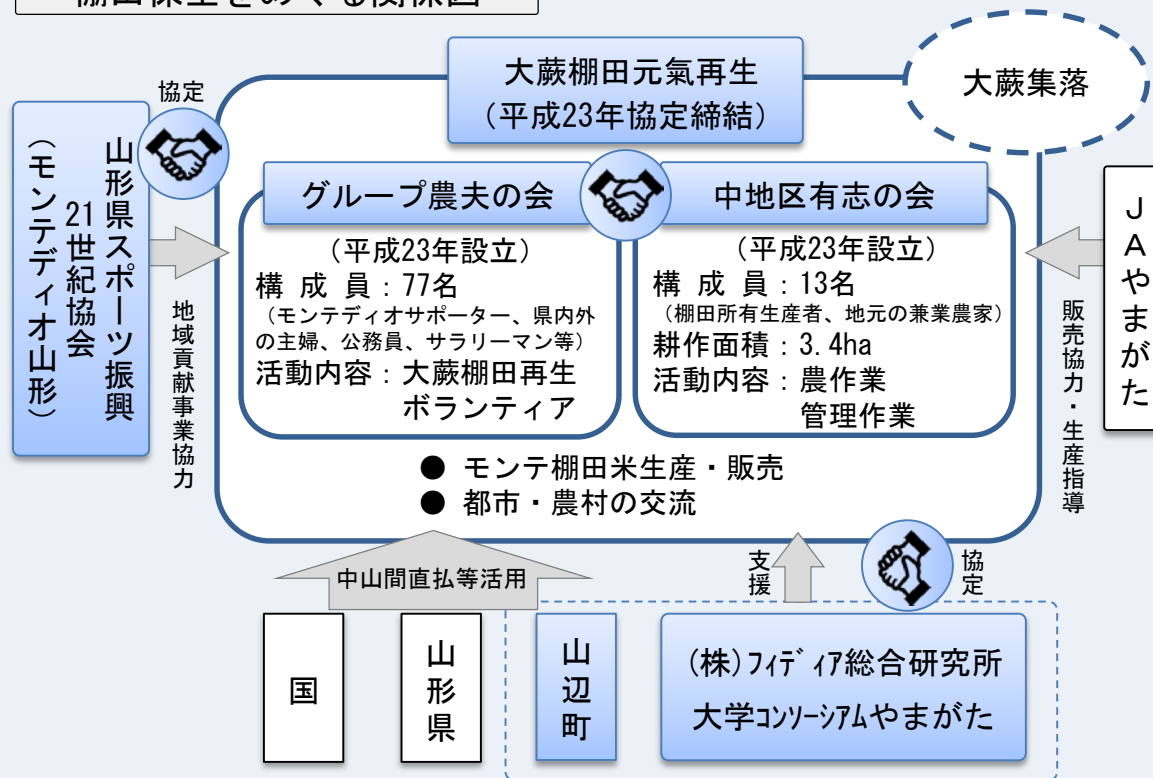
やまのべまち おおわらび

- 所在地：山形県東村山郡山辺町大蕨
(山形駅から車で30分)
- 枚数：約80枚
- 耕作面積：約13ha
- 耕作率：約91%
- 標高範囲：350～410m
- 平均勾配：1/7
- 法面の構造：土羽
- 開発起源：寛永13年（1636年）
- 水源：湧水
- 団体：中地区有志の会、グループ農夫の会
- 選定：日本棚田百選(H11)、山形棚田20選(H19)

地区の特徴、取組効果

- 大蕨棚田は町を代表する景観のひとつだが、担い手の高齢化等で一時は耕作率3割となり、伝統の杭掛け風景が失われつつあった。
- そこで、棚田の元気再生に賛同する5つの組織（下図青色）が協定を結び、棚田のてっぺんまでの再生を目指して取組を始めた。
- 各種取組や、プロサッカーチーム「モンテディオ山形」等の支援により、作付け面積を年々拡大するとともに、イベント開催時の参加者との交流も活発になってきている。

棚田保全をめぐる関係図



(上) 山形県大蕨棚田米とJリーグのモンテ棚田米の2種類を販売。アルケッツチャーノ奥田シェフのおいしい炊き方レシピ付き。

(下) 大蕨棚田再生事業の「棚田でダンス・大地の音が聴こえるかい」の一場面。年間を通して、このようなイベントを開催し交流を深めている。

キーワード

地域外との連携

企業CSR

棚田米販売

都市農村交流

クラブファン

ボランティア

【事例】地域外のアイデアとプロサッカーチームの協力を得て棚田再生を目指す

中山間直接支払交付金導入(H12)
町単独の杭掛け補助導入(H12)

H12から導入したオーナー制度は、受入れ側の疲弊、不採算等により、5年で断念

棚田の荒廃が新聞に掲載(H22)

きっかけ

オーナー制度を導入し再生を試みたが取組が途絶え、美しい景観が失われつつあった



伝統の杭掛け

☆非農家住民の行動がカギ

地元生産者だけでは棚田再生は困難と憂慮した地域内外の非農家住民らが、新たな組織による新たな仕組み作りで協力。

☆地域外（プロサッカーチーム）の協力がカギ

モンテディオ山形の協力で、地域や棚田に所縁のないサッカーファンも取り込み、知名度アップ。

Step 1 (H23)

中地区有志の会設立 グループ農夫の会設立

- 事業主体は、地元農家の「有志の会」とボランティア団体の「農夫の会」。「有志の会」は生産管理及び農業体験指導、「農夫の会」は事務局とマネジメント（生産支援、販売、交流企画等）を担う。
- 事業運営費は「農夫の会」会費と棚田米販売代金を原資とする。

Step 2 (H23～)

棚田再生に賛同する組織とコラボし、地域外との交流による地域の活性化

- 地域密着型のプロサッカーチーム「モンテディオ山形」、当時のやまがた6次産業推進事務局「(株)フィディア総合研究所」、「山辺町」を交え、棚田の保全を通じた農業の再生、環境の維持、地域の振興を目的とする5者協定を締結
- 協働の力で棚田再生スタート。田植え・稲刈り・杭掛けイベントや雪中棚田サッカー大会を開催し、大蔵棚田米・モンテ棚田米の販売開始。

中山間直接支払交付金を活用し、機械（病害虫防除の機材、乾燥・調整施設）や農作業を共同化



モンテディオ山形の選手、スタッフ、サポーター等が参加する大蔵棚田田植えイベント

☆相互扶助の取組がカギ

農家だけでなく、様々な組織の協働で、得意不得意を補いながら地域に人を呼ぶイベントや販売に取り組む。

Step 3 (H24～)

イベント追加

- 棚田の米粉教室・じゃがいも収穫体験・棚田収穫祭を開催

Step 4 (H26～)

イベント追加

- 杭掛けの棚田を舞台に「棚田でダンス・大地の音が聴こえるかい」開催

Step 6 (H28～)

イベント追加

- OWS参加者の発案で「棚田でダンス」と山形交響楽団とのコラボ、ワラビ採り体験等の新たな企画を開始

多面的機能支払交付金導入(H29)

Step 5 (H26)

ワークショップ開催

- 棚田の保全と次世代への継承を考える話し合い（WS）を、有志の会・農夫の会・町のメンバーで開催

いま (H29)

- クラウドファンディングにより苗代等を調達
- 棚田再生は、0.4ha(H23)→2.25ha(H28)、棚田米販売量は、1.7t(H23)→7.7t(H28)に拡大
- イベント参加者も少しずつ増加（年間550人参加）

今後の展望

将来に向けて

- ☑ 棚田のてっぺんまでの再生を目指す
- ☑ 棚田の文化的景観を次世代に継承